

【回想：ドナルド・メルツァーとの学びの体験】（2000）

Shirley Hoxter（シャーリー・ホクスター）

ここで私は、ドナルド・メルツァーがタヴィストック・クリニックにおける児童期および青年期のこどもたちを対象とした分析的セラピー・コースの発展に尽くされた極めて価値ある貢献について幾らかでも皆さま方にお伝えできたらと思います。主にメルツァーが1950年代の後半から1970年代の半ば頃迄の期間、スーパーヴァイザーとしてそしてセミナー講師として、直接的に指導的役割を担った点に集中してお話しようと思います。これらの学びの体験について私が語ろうといたしますのは、その多くがこの知性に^た長けた、独特な発想の持ち主であつたお方にどのように出会つたのかという私自らの記憶をもとに、それからまた、彼からいかにして学んでゆけばいいものかと内心大いに葛藤を抱えながら、それでも徐々に時間を掛けて進展していった彼との交わりについての私の個人的な思い出話になります。

こうしたことをお話することで、メルツァーおよびタヴィストックのチャイルド・サイコセラピストたち双方に何がもたらされたのか、またそのようにかなりの時を継続して尚もわれわれが一つの絆を生きたことが何であつたのか、幾らかでもお分かりいただけるかと思われます。心の痛みを伴う時期を乗り越えた同志として、われわれののなかでは、この交わりはずっと維持されていると申せましょう。たとえ今ではわれわれそれぞれがてんでバラバラになり、もはや互いに‘不在の対象’となっていると致しましても・・・。

ここで私がこうした発表をさせていただくことは、われわれの交わりが改めて追認されることにもなりましょうし、われわれがそれを一つの生きた経験としてこれからも守り抜いてゆくことを願わんとするものと理解されましょう。ビオンの概念をここで用いるとしますと、われわれの関係性のコンテイナー・コンティンダの側面というのはしばしば‘共棲的 symbiotic’と考えられるかと思われます。それは、ビオンの定義をメルツァーが引用しているところに従いますと（1978）、＜共棲的とは、すなわち思考と思考する者とはその対応関係において互いに一致したり修正し合ったりするものであります。思考は増殖し、そして思考する者は成長するのであります。＞これが、メルツァーとわれわれ自身との間における互惠的な性質の交わりを描写するにはまさにぴったりかと思われます。勿論それはそうした交わりが至極うまく機能している場合にはということになりますが。ここで‘われわれ自身’と申しますのは、ここタヴィストック、それに英国の他の地域の児童の分析的サイコセラピストに限りませんでして、広く海外からお越しの方々もたくさん彼との学びの経験を一緒にしたわけなのであります。

メルツァーとチャイルド・サイコセラピスト、そしてそれらを懐に抱えたタヴィストックの文化なるものがある関係性にあつたのか、またそれらは同じくタヴィストックの文化に貢献したともいえるわけですが、それがいかなる性質のものかを理解する前に、おそらくそれらが協同に至る以前に遡り、それぞれについて少し振り返ってみるのもよろしいかと思われます。実のところ、われわれがメルツァーからそしてメル

ツァーと共に学ぶという経験をする以前にどうであったのかを知ることなしに、メルツァーがわれわれのトレーニングにどれほど貢献したかを評価することはまったく難しいかと思われるのです。

ドナルド・メルツァーとは誰か？

彼はまずこの国に偽装して到着したのであります。彼のアイデンティティ、つまり彼の真の意図は、アメリカ合衆国の軍隊に所属する精神科医というユニフォームを着込むことで覆い隠されていました。それが大概のところ1950年代の彼でありました。この偽装した恰好での彼に一度私は会っております。それからずっと何年も経て、ようやく私は彼がアメリカで精神分析家として訓練を受けており、児童ならびに成人を対象とした臨床経験もあるということを知ったわけなのです。おそらく、彼はそのまま行けば彼の地で順調にそこそこ軍のなかでの栄達もあったろうかと思われるのですが、しかし彼は敢えてそうした未来を中断させ、この地でメラニー・クラインから分析を受け、他のクライニアン^①の分析家からスーパーヴィジョンを受けることで経験を富ませることを希求したわけであります。彼はこの地を訪れクラインの分析を単にその著作からではなく、直に経験として学ぶべく、何らかの方策を模索せんと決意していたもようであります。

私にとって、メルツァーが我が国に於いてその初期にどのようなことに専念していたのかは、Alberto Hahnの編纂した『Sincerity and Other Works』(1994)においてご覧いただける論文などによってしか知ることはできません。ここでその最初の2つの章が、この時期のメルツァーについて知る上で有益かと思われます。1955年に彼は「Towards a Structural Concept of Anxiety」というタイトルで論文を書いております。この論文は極度に抽象的といえますが、メルツァーがその当時それまでの訓練から受けた影響と、彼がクライニアンたちに遭遇し始めたことで受けた影響とを統合させんとして格闘しているさまがここに垣間見られるといったメリットがあります。また、ここから彼がかなり大胆に彼独自の頭で考えようと心に決したさまがうかがえます。確かにハンナ・シーガルが彼の注意を「死の本能 (the death instinct)」へと向けるようにと促したことで精神的な衝撃を受けたということはあったにしても・・・。

その次の章は、1959年に書かれたものですが、「A Transient Inhibition of Chewing」というタイトルです。この論文はまったく異なった性質のものであります。1955年の論文では、メルツァーは‘こころの構造的モデル’へと知性的バリエーションを試みており、そこには情緒的な信念はさほど見あたりません。こうして今や、ほんの4年の歳月を経て、彼はかなり有望な精神分析家として機能するようになっていったこととなります。彼は臨床に深く興味を抱き、それに大きな喜びを見出していったわけですね。ここで明らかに創造性が溢れ出てきたといったふうであります(たぶんそれは彼自身の分析によるものかと思われますが・・・)。臨床経験をj得るや、メルツァーはまるで籠の鳥がその籠から解放されたときに歌うであろうように嬉々として書くことをしていったわけですね。論文は概して臨床の素材に集中する体裁で著されたわけですが、またそこには彼がクライニアン^①的概念の全貌を把握し、自信を持ってそれらを自在に生き活きと活用していったさまがうかがわれます。そのようにして患者に関しての洞察とい

う点でも、またこれらを読者に伝えんとする点においても、かなりの深み・正確さに達しているのが見て取れるのであります。

この後、メルツァーのほとんどすべての著作は、理論と臨床経験を相互に関連づけるといったことに特徴づけられるようになってまいります。彼の著作のいずれにおいても、こうした統合性を彼が重要視している点が明示的にあちこち散見されるのであります。

これが、エスター・ビック(Esther Bick)によってチャイルド・サイコセラピストたちにスーパーヴァイザーとして推挙され、そして後にわれわれのトレーニングにさまざまな教育的企画をもたらし大いに貢献を果たすことになったメルツァーその人であったのです。

タヴィストックでのチャイルド・サイコセラピストのためのトレーニングの初期

われわれのトレーニングのプログラムは、当初ジョン・ボウルビー(John Bowlby)によって企画されました。彼はわれわれにすばらしい贈り物をしてくれたと言っていいでしょう。それはチャイルド・アナリシス(児童分析)の臨床経験を得るという機会であります。保険診療(The Health Services)という枠内でしたから、それはとてもユニークといえました。ボウルビーは、他にも何人かの学際的なタヴィストックのスタッフと共に、われわれが学際的なチャイルド・ガイダンスの一員として機能できるように訓練をしてくださり、そのようにしてやがてわれわれが公的なサービス機関に雇われて職を得ることも受け入れられるようにしてくださったといえましょう。

しかしながら、精神分析的理解という点では、実にそれこそわれわれのトレーニングの最重要課題であったわけですが、われわれはエスター・ビック(Esther Bick)を信頼していたわけです。そもそもボウルビーが彼女をわれわれの最初のSenior Tutor(上級講師)として採用したわけですが、そうした判断を後に彼は後悔することになります。それは徐々に彼らの方針が異なったものであることが判明していったからです。彼女の苛烈なクライニアン的洞察への擁護、そしてチャイルド・アナリシスへの熱烈な献身は大いにわれわれを鼓舞するものであり、そしてわれわれを終生変わらぬ学びの道へと導いていったのは事実であります。彼女は著述することは苦手でしたが、弟子たちを前に直接に面と向かっているときはまことに秀逸な教育者でありました。子どもの内的世界について理解、そして無意識的な空想というものの認識、そしてそれらがパーソナリティの発達にもたらす影響といったことを次々と明らかにしてくれたのです。彼女の乳幼児観察の方法は、当初われわれのトレーニングにおいて必要不可欠とされたわけですが、われわれのその後の臨床活動にも深く影響をもたらしたといえます。

ビックは、すぐれた著名な分析家たちに協力を仰ぐかたちで、われわれのコースに貢献を求めました。われわれのトレーニング症例の個別スーパーヴィジョンであったり、並びに臨床セミナーそして理論講読セミナーといったことであります。しかしセミナーは、それぞれが一度限りであったり、もしくは4回シリーズといったものでした。そうした著名なる人々によってわれわれのトレーニングが豊かなものとされたという

大いなる利点とは別に、統合性や連続性を欠いたものであったという不利な側面が指摘されましょう。特に理論講読セミナーにおいてそれが著しかったわけです。

しかしながら、われわれは彼らのほとんどが児童を対象にした臨床にもはや携わっていないということに気づき始めたわけです。そして、ビックとメルツァーのみが当時尚も子どもたちとの分析を励行していて、彼らだけが、それを熱烈にこれからさらに継続してゆかねばならない経験として進展させてゆこうと深くコミットしているということ、それは彼ら自身にとっても、子どもたちにとっても、そしてわれわれ同じ志を抱くところの学び手にとってもそうだったわけですが、やがてわれわれはそうのように感じるに到ったわけがあります。〔このことはエスター・ビックの1961年の論文の中で、＜チャイルド・アナリシスが痛く無視されていることを遺憾に思う＞といった記述があることでも十分に察知されましょう。〕 ビックならびにメルツァーにうかがわれたチャイルド・アナリシスへの熱烈な傾倒、そこにもたらされた彼らの感興、愉悦、そして信念こそがわれわれの学びの経験にとって最も貴重であり、大いなる賜物であったと言っていいでしょう。

われわれは、おそらく大概の外部から招聘されてきた講師陣にとっては訝しくすら映ったのではなかろうかと思うのです。ピオンは精神分析について学ぶということと精神分析家になるということを学ぶことについて明確な区別をしております。彼のその意味するところとは、大概のトレーニングを開始した人々は精神分析について学ぶといったわけでありますが、精神分析家になってゆくことを学ぶのには生涯をとoshiteの経験が必要とされてゆくということでありそうです。われわれ自身が被分析者になったパーソナル・アナリシスの体験のお蔭で、分析セッション中の子どもたちの強烈なインパクトに身を晒すといったことのお蔭で、そしてエスター・ビックがわれわれに教えてくれたその並外れた非凡なありようのお蔭で、われわれはどうか子どもたちの分析家になるべく最初の歩みに向けて歩を進めていったのだと思われます。その一方で、われわれは精神分析というものについて実に嘆かわしいほどに無知のままであったと認めざるを得ないわけですが・・・。

メルツァーは、精神分析の理論についてわれわれがあまりにも知らなすぎることに驚嘆したということをお私にかつて語ったことがありました。後に彼は、メラニー・クラインについても、どうやら理論について彼女は明らかに関心が乏しいといったことを書いております(1978)。＜あれほどに明敏な方をナイーヴ(単純・素朴)といったふうに語るわけにはまいりませんでしょう。ですから、どうやら科学的理念などといったことはほんとのところまるで彼女の関心を引くことはなかったと言ってよろしいでしょう。＞ もしもこれがクラインについて真実そうだとしたら、ビックについてはそのナイーヴであることが尚更そうだということになり、フロイド理論についての関心もまた乏しいといったことは間違いなくそうだということになりましょう。こうして1970年代の一連の講義・討議を待って、ようやくのことメルツァーは精神分析理論の発達についてのわれわれの無知を矯正すべく、その機会をものにしたわけであります。このことについては後にお話することにいたしましょう。

この時点で敢えて申し上げますと、彼がわれわれを導くにあたって眼目としましたのは、チャイルド・アナリスの今・ここでの進行中の臨床経験に深い活き活きとした関心を注ぐこと、それに連続的な概念化を伴わせること、そのようにして双方を連携させてゆくといったことでありまして、その面で彼は実に傑出した才能の持ち主であったことが殊更に強調されていいかと思われます。

メルツァーによる初期のグループでの指導的活動について

幾人かの資格を取得したばかりのチャイルド・サイコセラピストを個別にスーパーヴィジョンした経験から、メルツァーはやがてわれわれの持つ能力並びに弱点をも徐々に把握するに至ったようです。グループでの指導、それはほとんど1960年代をとおして継続されたものであったわけですが、彼はわれわれの弱点を補強し挺入れすることに着手したことになります。彼はまたこの機会に彼自らの‘公式化（formulations）’をまとめ上げていったことにもなります。それらはクライニアンを理解を基礎にしたものではありませんが、ますますビオンの影響が濃厚になってまいります。さらには、彼はこうした指導をとおして、よりいっそう幅広いさまざまな子どもたちに慣れ親しんでいったとも言えましょう。後に出版した著作のなかで多くこの時期の臨床体験について言及しております。

それらの最初のものは1960年に遡るわけですが、論文としてはごく最近刊行されたものであります。それは『Sincerity』(1994)の論文集のなかの一つで、「Lectures and Seminars in Kleinian Child Psychiatry」というタイトルです。この論文における主な関心は診断に関するものでありまして、クライニアン概念について明晰、かつ簡潔なる解説が載っております。

こうした一連の講義兼症例検討セミナーにおいては、子どもとのセッションから得られた臨床例がそこに出席していたチャイルド・サイコセラピストの面々から提供されたわけですが、彼らのほとんどはメルツァーから個別にスーパーヴィジョンを受けておりました。そうした証拠事実を得て、メルツァーは革新的な方法を思いつきます。一つのセッションを、左右別々の欄に書き記すといった構成で提示されました。まずは最初に子どものコミュニケーションの概要が書かれてあります。それら言葉、遊戯、もしくは振る舞いといったことから、それにはセラピストの解釈的な介入の要約が伴われておりました。これに並行して、もう片方の欄にはメルツァーのコメントが書き添えてありました。臨床資料について診断的に重要な意義深いことについてであります。そこには批判的なコメントもしばしば書かれてありました。つまりセラピストの介入を巡ってであり(もしくはその介入がないことについて)、結果としてそこから引き続き患者にもたらされた影響といったことについてであります。彼の注目していたのは終始転移関係のシーケンスでありました。臨床上の討議が済むまでは、子どもの背景となる家族歴などについてのごくわずかばかりの情報が知られることはありませんでした。

こうしたアプローチは、タヴィストックでその当時施行されていたアセスメントの手続きに慣れていたわれわれの眼には実に画期的と映りました。われわれの週ごとの学際的(異なった分野相互間の協同研究)な症例検討会はわれわれのトレーニング種目の主要なるものであったのです。アセスメントは、

親なり、教師たち、そしてその他、学際的なチームによって蒐集されたところの子どもの背景についての膨大な量の情報を網羅することでした。そこでは子どもを直接観察ということはごく僅かな位置を占めていたのでありますし、それに子どもが来所すること、それでそこで会う人々について、本人がどんなふうに感じているやら想像を働かしているかといったことなどはほとんど無視されていたわけです。

そこからアセスメントの情報量の複雑極まりなさをまとめるにあたって強調されることというのは、大概が子どもの現在現れている症状についての因果的説明でありました。これらは普通、外界に起因するところの因果関係であります。何らかの有害な人生経験とか、もしくは家族関係における何らかの問題点とかです。スタッフのメンバーそして幾らか大胆な訓練生との間で討議が起こります。そこに突如としてエスター・ビックが割り込んで、爆弾を投げ込むみたいにして痛烈極まりない洞察を披露し、そこですべて一件落着きといったことになるのでした。論争のドラマが繰り広げられ、こうした週ごとのトーナメントはスリル満点と言いましょ、実に興奮を呼び起こすわくわくさせるようなものであったわけですが、やがていつしか毎回結果が見え見えのありきたりなものになってゆき、そこで幾らか興奮も殺^そがれていったのです。

ここでの問題とは、情報があまりにも入念すぎて複雑に累積されており、その一方では、症候 (symptomatology) を外界の原因に帰すといった単純さがあり、子ども自身がどう考えているのか、子どもの心の内側がどんなふうになっているのかなど、何ら顧みられることはなかったという点です。私は一度敢えて尋ねてみたことがあったのです。それらの早期の原因が今この結果をもたらしているとして、この子どもの心のなかでこの歳月一体どんなことが起きていたのだろうかとか。そうした疑問に応える格好で、ビック及びメルツァーのどちらもが、散らかっている情報を無視して(突き破って)、子どもがわれわれに語ってくれるところのものに焦点を合わせようとしたのであります。ビックは子どもの無意識の空想、そして内なる対象がいかなるありようなのかといったことに心を尽くしたといえますし、一方メルツァーは、セッションのなかで繰り広げられる子どものあちらこちらと揺れ動く心の働きそのもの、特に子どもの投影的および摂取的なプロセスであります、さらに不安感そして分裂、希望、恐怖、そして防衛といった一回ごとに密着して観察されたセッションのなかで起こる転移にあらわれるそれらに綿密な注意を傾けていったのであります。

診断カテゴリーは、おそらく彼の関心の内には意図的に含まれていなかったでしょう。当時彼がスーパーヴァイズしていた症例それぞれの本質性に従い、それは決定されていたものと思われます。しかしながらそうであったにせよ、実際のところいざ彼が講義でそれらについて語る際には、いっそう話題は広範囲に及び、その詳細へと突っ込んでゆく巧みさそしてその的確さには著しいものがあり、彼はそれを診断カテゴリーに適用していったことになります。

メルツァーは引き続きこうした講義兼グループスーパービジョンを継続し、われわれと共に‘地理的混乱および地平的混乱’ (訳注; 内的母親対象のからだを巡っての混乱; その上下・前後が混沌としている状

態)がどのように解決されるか、あれこれと洞察を深めていったわけであります。彼は、こうした思索を『The Psycho-Analytical Process(精神分析過程)』(1967)の各章において、さらに詳しく敷衍し述べております。こうしたセミナーに参加して、一人の聴講者として私はしばしば話題に付いてゆけず置いてきぼりを食らったかのように感じたものです。そうした気持ちになるのは別に私一人ではなかったはずですが…。彼は解釈の精確さというものを求めたのですけれども、当時のわれわれの誰しもがその域に達していたとは言えませんでした。例えば、解釈がただ‘トイレット・おっぱい’と‘授乳するおっぱい’とに区別するだけでは充分ではなく、しばしばそれは乳首とおっぱいとが区別されるべきだというわけです。そしてこの部分対象に関連した空想にしても、それが‘離反されたもの’か、もしくは結合されたものとして経験されているかといったことははっきりさせなくてはならないといったわけなのでした。

彼はまた、解釈を与えるタイミングについても厳密でありました。例えば、もしも解釈が10分遅かったとしたら、そのセッションは断然違ったふうになることが展開して、その方がむしろ良かったと見做すことができるかもしれませんが、しかしそれすらもはや適切とは見做されないといったことになりがちでした。われわれ受講生にしてみれば、そんな彼がなんだかひどく小うるさいと思えて内心うんざりすることがあり、当然仲間内では互いに愚痴ることもあったわけです。

後になって、メルツァーはどうやらわれわれが彼の指導方法について些か妥当と見做しかねているといった困難を察して、そこからわれわれ向きにより適合した修正を試みてゆきました。「The Cycle of the Process in the Individual Session(個々のセッションにおけるプロセスの循環)」というタイトルの付いた第7章で、彼はセミナーで観察資料を提示するのに考案したテクニックについて念入りに明確な説明を試みております。そこで或る一人の子どもの一つだけのセッションを取り上げて、それを例証するのに、彼は2つの欄を並行して記述するといったそれまでのやりかたを変更しております。セッションの資料はもはや解釈の内容を含まないものとしたのです。というのは、メルツァーが語ったところでは、‘不安ならびに慎み深さ’がしばしば受講生に彼らの解釈を制限してしまいがちになるのに気付いたから…といったことのようにあります。セラピストの解釈、それにメルツァーのコメントが本来書かれるはずの2つ目の欄には今やグループ間で十分に討議されたあとで「公式化」されたサマリーが補充されることになったのであります。

『The Psycho-Analytical Process(精神分析過程)』において、メルツァーはビオンの業績に言及しております。私が把握した限りでは、メルツァーは「不在対象(absent object)」という言葉を使ってはおりません。しかし精神分析的なプロセスの‘サイクル’についての主なるテーマというのは、この概念によって大いに左右されていたというふうに思われます。対象の変容を詳細に辿ってゆきますと、まずはその不在が認められた折に、多くの異なったありようで防衛されながらも、しばらくでもそこに居る良い対象として再発見されてまいります。やがて徐々に不在のときですらもそれとして認められかつ尊ばれるようになりますし、そして心の内に依存可能な対象としてしっかりと確立されてゆくといったふうになりましょう。これは物語ふうなリズムをもたらします。(毎回のセッションの)1回1回、または週ごと、学期ご

とに、もしくは1年を通して・・・といった具合に、であります。対象と自己が別々である(separateness)といったこと、そして分離(separation)についても綿密に吟味されてゆくことになりましょう。それに伴い、このような情緒的痛み(emotional pain)といった、万人共通ともいえる経験を防御せんとして用いられる、どちらかというと有害な防衛が徐々に断念されてまいります。

これは、分離不安についてのわれわれの考え方に新しい局面を拓いていったことになります。そしてそれは、おそらくわれわれが後にもっと重篤の剥奪経験に苦しむ子どもたちをセラピイの対象とした際に、そうしたセラピイがいくらでも実践可能なものとなるのには極めて必要不可欠であったといつてよろしいかと思われます(Boston&Szur,1983)。

メルツァーとの個別スーパーヴィジョンの体験について

私はトレーニングコースの規定されたあらましを修了した後も、何年かほどエスター・ビックからスーパーヴィジョンを受けており、メルツァーとは彼のグループに出席するようになってから始まりました。多くの疑念を抱えながら、私は格別に畏怖すべき厳しいスーパーヴァイザーを予想していたことになります。頭脳明晰で新しい考えを創造する人で、だから自分などはとても足下に及ばないといったふうに・・・。だが当時の私の気持ちとしては、毎回の子どものセッションごとに繰り広げられるてんやわんやに耐えるだけのさらなる支えかつ導きを切実に求めていたわけです。われわれはそうした意味では互いに異なった思惑を抱いていたともいえましょう。

最初に私がスーパーヴィジョンに持っていった症例は、ロジャーという7歳の男児でありました。最初のセッションを始める際に、私は彼のコートを手元のフックに引っ掛けることをしてやったと報告したのです。そのフックが彼の手に届かなかったからです。メルツァーはこの点について技法上の違反だと私を叱責しました。その壁のフックが彼の手に届かないといった事態も不首尾であると指摘されました。私は、ビックから技法面において厳格であるように指導されており、それには慣れているつもりでいたわけです。が、それにしても、私は取るに足らないことでひどく叱られたということに内心ヒリヒリする思いがしたのです。その少し後で、ロジャーは小さな男の子の人形さんを手にとり、そして一匹の象に粘土の紐をその鼻に引っ付けるかたちで持たせます。メルツァーは、これを彼のコートを壁に掛けたという私の誤ちへの反応として解釈しました。つまりのところ私がその象であり、鼻づらを引き摺り回されているといったわけです。私が彼のお小言を気にせず、彼の意図するところの事柄にしっかりと耳を傾けることが出来たらよかったのですが・・・！実際のところ、メルツァーが即座にこの男の子の精神病理についての或る極めて重要な特徴を見抜いていたということを理解するのに、この後かなりの歳月が私には必要だったのです。ロジャーは何らかの手助けを得るや必ずその助けてくれた誰かに対して侮蔑をもって対処し、そしてそれを自分のパーソナリティの万能感的な部分が果たした操作的な才覚ゆえの達成と見做したわけでありました。これがロジャーの学習困難を惹き起こしていたことになりまし、また良き助けとなってくれる対象を摂り込み内在化させる能力をも損なわせていたことになりまし。このことは、勿論、実に私自身の

学習能力がその投影ゆえに、そして不適切と見做されることの恐怖によって損なわれていたということを例証している点で疑いようがありません。

最初のスーパーヴィジョンの最後に、メルツァーはこの男の子がかなり深刻な問題を抱えており、難しい患者になりそうに思うと言いました。そこで、その翌週、さらなる臨床素材を聞いたあとで、彼は私に、なぜこのケースをスーパーヴィジョンに敢えて持ってきたのか解らない。とてもありふれたふうに思えるし、私が自分一人でも充分に対応できそうに思えると言ったので、私は内心ひどくびっくりしたわけです。そう言われてみれば、悪い気はしないとしても、でも彼の言うことが事実そのとおりだとはとても思えませんでした。しかし私としてはとてもそうした疑念を口にすることはできず、それに彼が前回とは全然違うことを言っていると指摘し、その矛盾を突くことも敢えてしなかったのです。この状況は、われわれのいずれもが誤ちを犯していることが指摘されるかと私には思われます。つまり、メルツァーがこの事例は私の通常の能力の範囲において充分に対応できごく普通の事例であると思ったという点が一つ、またそれについて些か異議ありと感じた私自身が彼にそのように率直に伝えるにはあまりにも畏縮していたという点もう一つ…。

さらにこれに引き続き、私は他に3つの事例を持参しました。それぞれ何週間か継続して提出したわけですが、それらはスーパーヴィジョンには適当な事例とは見做されませんでした。それから私は新規の患者を持ったわけです。その子どもは精神遅滞と診断され、精神科医から私の許に紹介されてきたのであります。これは、実に興味をそそられる3歳児でした。ピフィーという名前で、後にメルツァーの自閉症に関する著作 (Meltzer, Bremner, Hoxter, Weddell & Wittenberg 1975) に彼は登場し、大いに貢献してくれました。ピフィーについて関心を共有できたことで、メルツァーと私はどうにか一緒に仕事に取り掛かることができ、そうしてわれわれは彼から学ぶべきものを多々発見してゆくことになったわけです。

しかしながら、なかなかその後も彼とのスーパーヴィジョンをうまく活用できたとは言い難い事態が続きました。問題となったのは、私が臨床素材を適切に提出することが出来なかったことがあげられます。ピフィーは週4回のセッションでした。しかし私はその一回のセッションの半分すらも書きとめることができなかったのです。ピフィーはメルツァーに多大な刺激をもたらし、彼は頭の中であれこれ思案に余念がなかったわけですが、それは自閉的状态そして強迫性といったことがらでありました。それが私にはなかなかうまく飲み込めず、内に葛藤を惹き起こしていたのであります。さらにもう一つ大きな問題点は、私がピフィーを診ていた時期、彼を自閉的というふうに見ることは真実受け入れ難いといった気持ちであったということです。

私には、メルツァーがスーパーヴァイザーという立場で、彼自らの‘頭脳の子ども (brain-children)’ の創造を促すべく必要な或種の思考への滋養物として提供される、そうした事例 (もしくは事例の何らかの選別された側面) を追求していたのではなからうかと思わせられました。今となっては、それも

「(たてそうだとしても)もはやどうでもかまわない」と言えるのですが・・・と言いますのは、メルツァーはまた確かに彼の弟子たちにたくさんの思考及び発達への滋養物をいっぱい与えてくれてもいたわけですから。だが当時としては、こうした疑惑が私の頭の隅で大いに引っかかっていたのは事実であります。しかしながら、私のそうした内密の不平にも関わらず、私たちには十分に共有し得るものがあつたわけです。この魅力的な幼い男の子にはどちらもがひじょうに強い関心を覚えました。彼の転移を精神分析的経験として活かすことの熱心さにも、そして実にスリリングで胸がときめくようなありようで彼の思考並びに発達能力が開花していったこともそうですし・・・こうした理解を経て、残余的自閉状態といった障害を明らかにすることにもなっていたのでありますし、同様にそれが正常な子どもの学習のプロセスにも光を投げかけていったともいえるのです。

自閉症についての研究グループ

やがてメルツァーは私のスーパーヴィジョンを打ち切ることにし、或るグループにその一員として私に参加を要請しました。そのグループというのは、それまでにかなりの期間それぞれが担当する自閉症患者について個別にスーパーヴィジョンをメルツァーから受けていたわけでした。ジョン・ブレンナー、ドーリン・ウエデル、それに イスカ・ウィッテンバーグ といった面々でした。そうしてわれわれは一丸となって、その後の3年程の期間大いに奮闘したのであります。なかなか厄介極まりない、苦痛以外の何ものでもない経験ではありましたが、やがて徐々にいろいろと啓発されることの多いものになってまいりました。

メルツァーは、このプロセスを一貫して厳しく統轄しました。彼はわれわれに、順番に、それぞれ過去の記録を振り返り、そしてそれらをグループ討議に持ち寄ることを要求したわけでした。そのプロセスの振り返りは、実に骨の折れる、困難を極めたものであります。私は自分の書き綴った資料、それは不備なものでしかありませんでしたから、それに改めて目を通すことは実に難儀なことで、恐ろしいとすら覚えたのです。しかしながら、私は他のグループのメンバーの経験から学ぶことが多いということにも気づかされてゆきました。それぞれが担当していた事例は、もっと重篤に自閉的でありましたし、それで誰しもが相当に辛い忍耐を強いられており、繊細さやら粘り強さなど大いに試されることを余儀なくされていたのであります。

事例の資料を振り返りながらも、そうしたことからいつか本の出版ということもありえなくもなろうといった思いつきを除けば、われわれはかなり長い間、われわれが何をしているのやらさっぱり解っていなかったといえましょう。自閉症についての著書というのは途方もないほどに野心的に聞えたのであります。メルツァーはなにやらそうした考えを幾らか目論んでいたのは察せられましたけれど、それらのすべてが口にされるまでにはまるで至っておりませんでした。

やがて、メルツァーはこのグループの会合を打ち切ることに決めました。われわれはそれぞれ自分の事例の資料を纏めるようにと要求され、われわれがセラピイで共にした子どもによって例証される、或る自閉的状态の或る特徴に応じて焦点付けられることになってまいります。ここに至ってようやく私にも、

われわれそれぞれが担当するまったく本質的に異なる事例が、或る自閉的特徴の一貫した連続性のそれぞれ違う段階をあらわすところのものと見做されているらしいということが薄ぼんやりと解ってまいりました。しかしそうしたアイディアにしてもどこか半信半疑であったわけです。

私が安堵したのは、ピフィーがここで「残余的自閉症 (residual autism)」として例証されるべき子どもとして参照されていたことであります。しかしながら、私は何やら戸惑いを隠せませんでした。というのは、私に割り当てられた課題というのが、彼の強迫性及びその「分解 dismantling」のプロセスに焦点づけられていたからです。

ピフィーは今や12歳になっておりました。彼のセラピイの第二段階へと進んでいたわけです。彼は断固として、言うなれば引き伸ばされた潜伏期的な状態にしがみついていたわけです。それは著しくも強迫的な特徴を帯びておりました。この時期に、メルツァーは私に、「分解 (dismantling)」もしくは「切片化 (segmentation)」といった概念の略述された、何ページかのタイプされたものを送ってまいりました。

これらの新しい語は、その当時のメルツァーの早期小児自閉症についての理解では中核となるものです。それらは、われわれの自閉的な患者に観察されたプロセスを、正常な発達において用いられている分裂機能 (the splitting function) から、そしてよりいっそう病理的な状態において見出される分裂並びに投影同一視からも区別されるべき特徴と見做されたのであります。それというのは、対象をただ単一の感覚で注目するといった体験のありように関連しております。例えば、見られる対象は同時に聞かれる、触れられるもしくは吸われるといったことはないといったことであります。自閉症の重篤な状態では、或る一人の対象へ向けられた感覚の協調は脆弱であり続けます。ストレスが嵩じた場合、もしくは注意が散漫となった場合、感覚器官が、それに彼に関係づけられる対象もまた受け身的にバラバラになってしまうのです。これは、虚脱状態そして‘コモン・センス (共通感覚) を欠く状態’ (ビオン) において見られるものといえましょう。それこそが大概の自閉的子どもたちにとっては特徴的なものであります。

ピフィーのそうした心的プロセスは、他の方々が担当されていた子どもたちに比べればさほど目立って深刻だったわけではありません。彼はしばしば彼の対象を切片化しましたがけれども、感覚的体験のパターンにおいてはそれほどではなく、時としてそこにはむしろ防衛的意図がうかがわれました。幾らか自閉的ではない子どもの場合ですと、サディズムが欠如しておりますので、損なわれていない、迫害的ともいえない対象を新たに組み立てるといったことが可能になるといえましょう。自閉症においては、それぞれの或る何かが感覚的に保持され、強迫的に支配され、そしてその選ばれたものは繰り返し際限なしに並べ換えられて組み立てられるといったことになります。それが私のピフィーの事例では実に顕著な特徴なのでした。メルツァーから私宛に届けられたものは概略的な草案でしかありませんでしたが、実に考えが明快で、目配りが充分に行き届いておりました。そこでようやくのこと、私はそこで語られている考えをどうにか把握でき、それらをピフィーとの進行形の、それ以降のセッションにおいても大い

に援用してゆくこととなったわけなのです。こうして、それまで学んできたことがようやく活用し得るものとなり、意味がもたらされたこととなります。

われわれが再びグループとして相まみえることになったとき、そしてそれぞれがどのような貢献をなしたのかを耳にした時、われわれの誰しもが大いに驚愕したと思われます。実に成果ともいえるものが視覚化されてきていたのです。或る明快な連続的な思考の筋道が今やそこに一貫して見えてきたというわけであります。われわれそれぞれの一見して異なる多様な事例から、幾つかの自閉症のスペクトルにおける意味ある重要ポイントが浮き彫りにされてきたということになります。

私は、本のタイトルが『Explorations in Autism(自閉症世界の探求)』(1975)になるということで内心大いに安堵いたしました。こうした類いの精神分析的探求は、自閉症、精神病、そして他の領域でもそうですが、これまで精神分析的なアプローチでは接近不可能と考えられてきました。当初セラピイの成果といった観点からして途轍もなく不十分としかいえないといった傾向がありましたし、それについて‘説明する’新しい理論の構築にはまるで至っておりませんでした。しかしながら、ここによりやく新しい洞察を得たといっているいいでしょう。将来の精神分析の探検家たちがそれぞれにかなりなじんだテリトリーをさらに推し進めてゆくうえで道を付けたことになりましょう。そしておそらく彼らは、何故に先駆者たちがこれほどまでに骨折り苦闘をしたのかとむしろ訝るのではないかしらと思われまふ。(それにいくらか似ているかと思われまふことは、今世紀になって登山家エドモンド・ヒラリー、そしてシェルパのテンジンがエベレスト初登頂を果たしたという快挙を私たちは知っております。それまでは誰もがそれをまったく不可能と考えていたのです。しかし今ではそれも多くの人のとってもはや夢物語ではありません。当然ながら、尚も絶えざる忍耐、チームワーク、そして技術が求められるでしょうけれども・・・)

発刊された本はわれわれ担当者四名の症例素材が載っているだけではありません。そこには他にメルツァーの所見が大いに書き綴られてあります。理論化の試み、そしてそれらの意味するところについてです。それに伴い、彼自身の患者からの臨床素材もさらに加わり、そして「付着同一視」についてのビックの業績の引用も多々ございます。

振り返って、この長き期間に亘って私が携わったこの研究は、私のセラピストとしての成り立ちには不可欠な経験であったと思われまふ。これがその後においても自閉的な特徴を示す患者とのセラピイに大いに役に立ったのは勿論ですが、それだけではありません。いかにして患者から学ぶか、それにスーパーヴァイザーからもどう学ぶか、そしてグループで互いに体験を分かち合うことから何を学び得るのか、私はそうしたことを学んだように思われまふ。そして尚その後、私自らこうした重層的ともいえるかつての経験を振り返りつつ、出来る限りそれらを自分の内側で統合させんとし、深く考えを巡らしながらさらに学びを続けてまいったともいえるのであります。

タヴィストック・チャイルド・サイコセラピイ・トレーニング・プログラムの発展の時期

この自閉症の研究に携わっていた時期、メルツァーは相当数の他のチャイルド・サイコセラピストたちをスーパーヴァイズしております。

一方では、この間われわれのトレーニングのプログラムはいっそう拡張されていったのであります。これは実に、マーサ・ハリスという方の啓発的な影響力そして並外れた才覚に多くを依っていたと言えます。統率力の面でも、またその教育的指導性においても彼女は際立っておりまして。こうしたこともあって、やがてエスター・ビックがタヴィストックを去った後、彼女はわれわれの統括的主任 (Senior Organizing Tutor) になるに至ったわけです。コースはその研修期間という点でも拡張されましたし、そこに参入する受講生の数も当時爆発的に増加しつつありましたし、さらには課題種目の数も増え、またそれが網羅する範囲も広げられ、またその内容面でも大いに充実していったわけです。ここに至って、われわれはそれまでにスーパーヴィジョンやら他の訓練種目のため依頼していた外部のクライニアンの子精神分析家の善意やら専門技術にばかり頼っていた状況ではもはやないと悟ってゆきました。われわれが経験を増してゆくなかでそして成長してゆくなかで、我々自身が来るべき新世代の訓練生に対してその訓練および個別のスーパーヴィジョンやらも引き受けてゆかざるを得ないし、そうすることが明らかに妥当でもあり、この状況ではむしろそれが緊急な任務とも思われたわけです。マーサ・ハリスが訓練生たちのトレーニング・ケースのスーパーヴァイズを要請した人々というのは、資格を得た後も尚さらなるスーパーヴィジョンを受けていた方たちであります。そうしたスーパーヴィジョンはほとんど常にとってもいいくらいメルツァーだったわけです。そういうわけで、彼はわれわれのトレーニング・プログラムが生き残り、さらなる発展をしてゆくために大いに尽力くださり、つまりのところその影響力も甚大であったといってい

いでしょう。

ここで一つ質問が起こるはずで

す。彼の影響は過剰ではなかったかということです。カリスマ性があり、頭脳明晰で、個として独自性を維持しており、かつ精力的な思索家たる人というのは、否応もなしに誰彼の投影の標的にならないはずありません。そしてそこでは得てして偶像視されることだって起こりましょうし、むしろ畏怖され危険視されるといったことだってありましょう。スーパーヴィジョンを受ける訓練生は、分析における被分析者にも似て、自らの依存性を向けられる誰かを探しているのであります。その一方でそうした依存性に抗いながら、それぞれに自らの独自の考えを貫く態度を維持せんとする必要性を自覚していないわけではありません。自らのフィーリングを感じ取ること、そして自ら希求することに忠実であろうとするでしょう。こうした内なる紛糾をすべて整理整頓してゆくこと、それは概して投影的ならびに摂り入れの同一視の領域なわけですが、それは分析的取り組みにおいて主要課題になります。であればこそ、たぶんそれはいわゆる「トレーニング・アナリシス」と言われる場合ですと殊更に強調されるものになろうかと思われ

ます。

自己分析 (self-analysis) の内なる取り組みは、外的な分析家との接触を終えることからどうにか生き延びんとすることが望まれるだけではありません。さらに内的対象としての分析家の支配を超えて自ら成長を遂げてゆくことが望まれてまいります。スーパーヴィジョンそして自らのセルフ・スーパーヴィジ

ンということについて申しますと、上記したことがらに幾らか似た過程を辿るかと思われますが、その影響の刻印をひきずるという点から申せばさほどでもないと言っていいでしょう。

メルツァーは、こうした問題について深く思いを巡らせていました。彼の著書『Sexual States of Mind (こころの性愛状態)』(1973)において、その「The Genesis of the Super-Ego-Ideal(超-自我-理想の起源)」の章(第2部/第10章)でこのことについて問題提起しております。そして再び「Work, Play and Sublimation(労働、遊び、昇華)」の章(第2部第17章)に戻ってさらに論議を重ねております。どちらの章でもメルツァーは同じ夢素材から、そこで語られるところの言語並びに想像力を活用しております。メルツァーは、親的对象からの承認を得るといった‘ゴール’に到達する意図ゆえに「父なる人の足跡を辿る」ということとは違って、よりいっそう自由に選ばれた目的を遂行せんがために、内在化された対象を盾にして護られながら、それが提示するところの方法並びにプリンシプルに従うといった、むしろより成熟した状態があり、それらは厳密に分け隔てされねばならないと強調しておられます。私としては、これこそわれわれが彼とご一緒したところの学びの体験から徐々に惹起されるものと彼が望んでいたことではなかろうかと考えます。これは「Learning to growth(成長への学び)」(Bion,1965)からの変化に関係しております。

フロイト、クライン、そしてビオン:クライン派の発展

メルツァーは、われわれチャイルドサイコセラピストが精神分析理論についてあまりにも無知であることを忘れてはいませんでした。でありますから、1970年代の殆どを彼はそうしたわれわれの欠如を補うべく取り掛かったのであり、幾つかの‘世代’に列なる訓練生たちを対象にして、熱心にかなり長期に亘って根気強く尽力を惜しまなかったのであります。彼の『The Kleinian Development(クライン派の発展)』(1978)に於ける「緒言」からみますと、この著作は実のところ彼自身のパーソナルな発展と密接に絡んでいたということが明らかでありますし、また同様に彼が、われわれのニーズというものに充分気配りをしながら、われわれの主要なる関心がクラインの業績および臨床経験にあることを認め、そうした了解に導かれていたことが十分にうかがわれるのであります。

フロイト、クライン、そしてビオンの影響について、彼は<私の成長というのは、これら三人の非凡なる方たちへの転移、さらには同一化に圧倒的に影響されていたとっていいでしょう>(原書 P.2)と語っております。これに引き続き、また彼はこうも語っております。<一連のこれまで私が携わってきた研究および講義とは・私の精神分析的発展における連続的なもの、もしくは非連続的なものとは何であるかを規定せんとした試みであったといえましょう。それは言うなれば、「結合された精神分析的对象(a combined psycho-analytical object)」が自分の中で幾らかなりとも盤石に培われたといえるかどうかといったことが実は肝要であったわけです。自分としては、その庇護下にあって、その盾を守り手として、いつか自分が創造的に、かつ勇気を奮って邁進できるようにと願ってきたということになりました。>

そういうわけですから、そうした講義セミナーは、彼という人となりの個人的でパーソナルな統合といった内的な取り組みへのコミットメントによって鼓舞されていたとも言えましょう。そしてそれゆえに取り上げられた課題がいっそう面白く読ませるべく活気づけられていたとも考えられます。しかし訓練生もまた、そのテキストを読みながら、それらを咀嚼吸収すべく試みるといったそれぞれ個々の挑戦が要求されたのであります。それら講義のシリーズは、トレーニングコースの5年間に亘っての文献講読セミナーのプログラムというその後の発展のモデルとなったわけです。それについては他にも多くの方々が引き続き延々と多大なる貢献を惜しみませんでした。彼らは、われわれのトレーニングに厳密さ、そして規律のある、鍛えられた思考といった‘バックボーン(背骨)’を付加してくれたことになります。

ドナルド・メルツァーは、精神分析をいっそう修業されんとして我が国にお越しになられ、そしてやがて寛大にもわれわれの教育に彼の持てるすべてを惜しみなく注ぎ込み、われわれを大いに鼓舞されたということになるわけなのですが、そうした‘偶運’をこの上ない大きな喜びと思うのは、われわれ誰しもが心に抱くところと言っていいでしょう。

(訳: 山上千鶴子 2018/11/24)

〔付記: 原典は、『Exploring the Work of Donald Meltzer』edited by Margaret Cohen and Albert Harn. Karnac Books(2000)。この論文「Experiences of learning with Donald Meltzer」は、第2章に掲載されたものであります。

尚、Mrs. Hoxterは、訳者(山上)がタヴィストックに在籍していた当時(1973-79)、教師陣の一人であられた。マーサ・ハリスが1979年に退任された後、それを引き継いでタヴィストックのチャイルド・サイコセラピスト・コースを統括する任に就かれておいでです。トレーニング・ケースのスーパーヴィジョンをお願いしたこともあり、訳者にとってはとてもご縁のあるお方なのです。どちらかという地味で朴訥といった感じのお人柄と記憶されているが、この論文を訳しながら、今にして思うに、かつて彼女から語られた事柄で印象に残ったものが幾らかやはりメルツァーからの学びがその背景としてあったのだということを改めて気づかされた。思想がそのようにして人の手から手へと手渡され、やがて‘伝統’となることを思えば、実に感慨深い。

さらにご興味のおありの方は、『自閉症世界の探求』平井正三監訳・賀来博光・西美奈子他訳・金剛出版(2014)の第6章「自閉症の残余状態と学ぶことへのその影響—ピフィー」、並びに『被虐待児の精神分析的な心理療法—タヴィストック・クリニックのアプローチ』平井正三・鵜飼奈津子・西村富士子監訳・金剛出版(2006)の第15章「被虐待児とのかかわりにおいて喚起される感情」をぜひご参照いただきたい。〕

※参考文献※

- Meltzer, D. (1967) The Psycho-Analytical Process. London: Heinemann Medical.
(邦訳:『精神分析過程』松木邦裕監訳・飛谷渉訳. 金剛出版 2010)
- Meltzer, D. (1973); Sextual States of Mind. Perthshire : Clunie Press.
(邦訳:『こころの性愛状態』古賀靖彦・松木邦裕監訳. 金剛出版 2012)
- Meltzer, D., Bremner, J., Hoxter, S., Weddell, D., & Wittenberg, I. (1975)
Explorations in Autism : A Psycho-Analytical Study. Perthshire : Clunie Press.
(邦訳:『自閉症世界の探求』平井正三監訳・賀来博光・西美奈子他訳.
金剛出版 2014)
- Meltzer, D. & Harris, M. (1976) A psychoanalytical model of the child-in-the-family-in-the-community. In: D. Meltzer, Sincerity and Other Works : Collected Papers of Donald Meltzer, ed. by A. Hahn. London : Karnac Books, 1994.
(邦訳:『こどものこころの環境—現代のクライン派家族論』木部則雄・池上和子他訳.
山上千鶴子解題. 金剛出版 2018)
- Meltzer, D. (1978) The Kleinian Development. Pershire : Clunie Press.
[Reprinted London:Karnac Books,1999.]
(邦訳:『クライン派の発展』松木邦裕監訳 世良洋・黒河美鈴訳 金剛出版 2015)
- Meltzer, D. (1983) Dream-Life-A Re-examination of the Psychoanalytical Theory and Technique. Perthshire : Clunie Press. (邦訳:『夢生活—精神分析理論と技法の再検討』新宮一成・福本修・平井正三訳. 金剛出版 2004)
- Boston. M & Szur. R. (1983) Psychotherapy with severely deprived children.
Routledge Kegan&Paul plc. [Reprinted Karnac Books,1990.]
(邦訳:『被虐待児の精神分析的な心理療法—タビストック・クリニックのアプローチ』
平井正三・鵜飼奈津子・西村富士子監訳 金剛出版 2006)
- Meltzer, D. & Harris Williams, M. (1988) The Apprehension of Beauty. Perthshire: Clunie Press. (邦訳:『精神分析と美』細澤仁監訳 上田勝久・西坂恵美子・関真粧美訳 みすず書房 2010)
- Meltzer, D. (1994) Sincerity and other works : Collected Papers of Donald Meltzer, ed. by A. Hahn. London : Karnac Books.
- Cassese. S. F. (2001) Introduction to the work of Donald Meltzer. Edizioni Borla. Italy.
(邦訳:『入門 メルツァーの精神分析論考—フロイト・クライン・ビオンからの系譜』
木部則雄・脇谷順子訳 山上千鶴子解題・訳 岩崎学術出版社 2005)
